

平成27年度 第5回観察会 記録（1回目）

日 時	平成27年10月19日(月)～20日(火)
観察地	京都府南丹市美山町 美山かやぶきの里 及び芦生の森
講 師	かやぶきの里ガイド：美山民俗資料館 館長 中野 貞一氏、 芦生の森ガイド：1班 高御堂 麻里子氏、2班 三船 國彦氏
テー マ	「美山かやぶきの里・芦生の森」自然観察会
備 考	参加者数 18名、スタッフ 田中和江、藤田益栄、長野馨、飯田正恒 記録 飯田

1日目(10月19日)・晴 美山かやぶきの里見学

「きたむら」で昼食後、ガイド中野さん（右写真）と合流。美山かやぶきの里を案内していただいた。以下その概要。



1. 北地区に存在する50棟の家屋のうち、38棟がかやぶき屋根で、寛政8年（1796）築の最古の家をはじめ、江戸時代に建てられた18戸はいずれも北山型の入母屋造りの民家。平成5年、国的重要伝統的建造物群保存地区に選定された。
2. かやぶきの材料は主にすすきで、由良川に架かる長除橋を渡ったところの茅場で作っている。
3. 茅葺き屋根の維持のためには数十年毎に葺き替えが必要。一時、茅葺き職人の後継者がいなくなりそうだったが、近年、住民の中から職人が誕生した。地区内ののみならず全国からの要請に応えている。
4. 茅葺き屋根の住居は火に弱い。2000年には「かやぶき交流館」が火事で焼失（2年後に再建）、火災対策は重要事項。住居の母屋毎に「放水銃」を配備、普段は小屋の形をした収納箱の中に収納。使用時は遠隔操作により液圧シリンダーにより小屋の屋根が開き、放水銃が迫り出して放水する。毎年2回（5/20、12/1）放水訓練実施。
5. 美山民俗資料館に入館。居室やカヤを保存する屋根裏、屋根の構造などの説明は非常に興味深かった。
6. その他：地区民の信仰を集める知井八幡神社にて、縁起や本殿彫刻の説明などを含め、通常の観光旅行にはない興味深い説明を沢山していただき、参加者一同おおいに感銘をうけた。

2日目（10月20火）・晴 芦生の森トレッキング

8時30分、河鹿荘にてネイチャーガイドのお二人と合流、マイクロバスで長治谷作業小屋まで行き、整備体操後2班に分かれてトレッキング開始。お二人とも弁舌さわやか、話題豊富で、芦生の経験豊富な参加者も引き込まれるガイドは大変好評でよく理解できた。以下その概要。



1. 芦生研究林の立地条件、気候と植生について

京都府の北東部・由良川の源流に位置し、福井県と滋賀県に接する芦生の森は、標高600～800mの部分が約2/3を占め、降水量は年間2350mm、冬期の積雪は2～3mに達する。植生は日本海型と太平洋型が混在することから、天然林はさまざまな種類で構成されている。

2. 芦生の森・杉尾峠に源流をもつ由良川は若狭湾に流れ込み、その生き物に大きな影響を及ぼしている。

また、日本海からの水蒸気が雨や雪となって芦生の森に帰り森を育てる。由良川の流れが起こる最初の一滴をみて改めて、“森里海連環”を強く実感できたように思う。

3. シカの食害の現状と森の再生への努力

シカが2000年前後から急増し林床を覆っていた下層植物が消えた。残っている緑はシカの食べないオオバアサガラ等か、またはシカの届かない位置にあるものだけになってしまっている。鹿の食害は、単に下草が減るだけではなく、連鎖的な問題が起こるので対策が急がれるところであるが、芦生研究林ではシカの影響を科学的に検証し、植生を守るため、16ヘクタールの谷を柵で囲った結果、柵内では植生が徐々に回復し、柵の外の食害の影響がはっきりとわかるという。長治谷で、柵内外の植生の違いを眼の辺りにしてしっかりと認識できた。シカ食害防止対策の今後の動きに注目したい。

4. 芦生の森の自然・・印象に残った植物など

- (1) 芦生スギ：長治谷芦生スギ保存林。ならびに下枝が地面に接し、そこから根を出して一本のスギになり繁殖する「伏状更新」の説明を聞きながら、すさまじいばかりの枝の張り方にみなびっくり。
- (2) ミズメ：枝や幹を傷つけるとサロメチールの香りがすることを体感した。
- (3) ブナ：『ブナ一本でブリ千匹』が育ち獲れるという、富山の漁師達の昔からの格言を聞いて驚きの声。またブナの森は、他の森林と比較して保水力が高く、その秘密はブナの葉と地面にある。ブナは広葉樹で、丸みを帯びた形の葉は、面積が広く雨をたくさん受け止め、少しへこんだ形なので、雨を葉にためることができ、枝を伝って幹の方に水を流す。こうして、根元に集まった雨水は、積み重なった落ち葉がスポンジ状態になり、水がためられる。「一本のブナの木から8トンもの水がわき出る」とも。
- (4) オニグルミ：根元にリスが見事に真っ二つに割って食べた殻が沢山落ちていた。、テコの原理で割るのだと。
- (5) サワグルミ：冷涼な山地の渓谷にみられる樹木。トチノキやカツラなどと渓畔林をつくる樹木。
- (6) オオバアサガラ：ニホンジカの不嗜好植物で、研究林に多く見られた。
- (7) カツラ：下谷の大カツラも見事であるが、上谷のカツラも立派で、落ち葉から心地よい香り。、
- (8) サルナシ：ガイド三船ガイドが栽培し持参のサルナシの実を試食、おいしいと好評であった。リング状になった太い蔓にぶら下がり、子供に帰った気分をちょっぴり味わった。
- (9) オオイワカガミ：大群落があり、花の時期に見たいとの声がしきり。
- (10) サワフタギ：ルリ実のウシゴロシの異名弹性に富み牛の鼻輪に使用したことから。三船ガイドは鼻輪の現物を持参し見せてくれたが、久しぶりの見て興味深く思うのと、その熱意に圧倒される思いでした。
- (11) ツキノワグマの越冬に適したムロ：トチノキの根元近くに越冬するムロを観察。
- (12) モリアオガエルの産卵池：産卵の時期には狭い池がオタマジャクシと捕食者のアカハライモリで賑やかな様子が眼に浮かぶようであった。

以上